

AR（拡張現実感）を活用した まちなかの空間活用に関するフィールドワーク

団体名●岡ゼミナール／代表者名●岡達哉（経済学部経営学科教授）

はじめに

国土交通省が道路占用基準を緩和したことを契機として、静岡県浜松市をはじめ各地の自治体の中心市街地や商店街で、店先の歩道にテーブルやベンチなどを置いて営業するオープンテラス化など道路空間の有効活用を促進する動きがみられる。

道路占用基準の緩和は、「新しい生活様式」としてのソーシャルディスタンスに配慮した空間利用を促すと同時に、新たな「経験価値」の創出により、コロナ禍で集客に苦しむ店舗型ビジネスの支援にもつながる。金沢市でこのような施策を展開することは、ビジネス支援に加え、通過交通量の抑制による高齢者や子どもも安心して歩ける都市空間の創出、地域の緑化やアートとのふれあい、「金沢らしさ」の再発見などを通じて様々な社会課題の改善をもたらし、ひいては創造都市論の第一人者である佐々木雅幸（学校法人稲置学園理事・金沢星稜大学特任教授・大阪市立大学名誉教授）が提唱する「社会包摂的創造都市」の本格構築につながる可能性も秘めている。

活動内容

経済学部岡達哉ゼミナール（以下「岡ゼミ」）は2020年10月24日（土）、地下歩道「むさしクロスピア」（金沢市武蔵が辻）周辺でフィールド活動を実施した。

金沢中心商店街武蔵活性化協議会と本学の間で締結された地域連携協定に基づき、当該エリア周辺の地域活動を岡ゼミが担ってきた経緯を踏まえ、同協議会が管理する「むさしクロスピア」における本件活動についても同協議会の了承を得て実施した。

この活動では、EPSON社のスマートグラス（BT-300）を使用し、実際の道路空間や地下空間に、そこには存在しないオープンテラス（テーブルや椅子等）のほか、近江町市場のある海産物を中心とした「金沢の台所」の地域ブランディングも視野に入れたアクアリウム（水槽）、絵、オブジェ、照明などアートの画像を学生の自由な目線から重ね合わせる「AR（拡張現実感）」の活用を試みた。

成果、結果の考察

本件活動は、稲置学園広報誌「サエラ」59号ほか新聞等の各種メディアに取り上げられ（<https://news.yahoo.co.jp/articles/021786728711f4b92cf95d6d35daf1453fb75021:2021/3/1> 閲覧）、各方面からの問い合わせが相次ぐなど社会的反響を集めた。少子高齢化が進む地方都市が持続可能な形で発展するためには、観光による経済効果だけでなく地域住民が安心して暮らせる環境という視点から中長期的なまちづくりを考える必要があり、国の規制緩和を契機に産官学が連携して公共空間のあり方を見直すことはその第一歩となるものと期待される。



写真上：実際の道路空間

写真下：AR（拡張現実感）によるオープンテラスのイメージ

今後の課題、展望

今回の活動は、地域連携協定に基づく学修と本学ホスピタリティ教育研究所が進める研究活動の一環で行ったものである。今後も社会におけるホスピタリティデザインの視点から、ソーシャルディスタンスに配慮した「観察調査」をフィールドワークで活用しつつ、自然環境や文化と調和した安全安心な暮らしと経済活動の両立について探ることとしている。